

ニュースレター

いりおもての森から



林野庁 九州森林管理局
西表森林生態系保全センター
令和2年8月発行 №58号

「新型コロナ」

昨年末に中国湖北省武漢市で発生した原因不明の肺炎が、新型コロナウイルスが原因であると判明して以来、瞬く間に世界中に広がり大流行となりました。日本でも大型クルーズ船の感染者や大都市を中心に広がりを見せ、国や地方自治体による蔓延防止の対策が行われています。

例年であれば学生の卒業旅行等で多くの観光客で賑わうはずの西表島にも、大きな影響を与えました。

国による緊急事態宣言や感染症蔓延防止対策の徹底が求められる中、竹富町では限られた診療体制のため、感染者が発生した場合に十分な医療提供が出来ないことや、これに伴う搬送体制にも限界があること等から、町による石垣島から竹富町各島に行き交う高速船等の就航の一部停止、町内への旅行等の自粛要請が行われました。

当センターでも、コロナ感染拡大防止を図るため現場である西表島への出張は控え、事務所や在宅でのワークとなりました。緊急事態宣言の解除後6月中旬頃から徐々に以前の状態にもどりつつある中、各種モニタリング等の保全活動を実施しています。



「緊急事態宣言下の石垣島離島ターミナル」

中学生奮闘「仲間川を筏で川下り」 (西表島の中学校の三大行事を支援(大原中学校編))

竹富町立大原中学校の三大行事の一つ、「仲間川筏下り」が7月11日(土)に行われ、全校生徒33名と保護者ら関係者を含む総勢66名が参加しました。当センターから2名、沖縄森林管理署大原森林事務所森林官も行事支援として参加しました。

当日は晴天に恵まれる中、1年生から3年生及び保護者がそれぞれの筏4艇に12名から15名が乗り込み、最上流の7.5km地点からスタートしました。

上流は、川幅が狭い上に、両岸からサキシマスオウノキの枝などが張り出し、筏の進行を妨げる最初の難所に遭遇、各筏とも個性あるチームワークを発揮し、エークや竹竿を操り、四苦八苦しつつも何とか通過しました。

川幅も視界も徐々に広がり始める中流域では、左手にウブンドルのヤエヤマヤシ群、右手には巨樹巨木100選のサキシマスオウノキを眺めながら通過、順調に進む筏に安堵したのも束の間、浅瀬に乗り上げ筏を押ししたり、引っ張ったり、漕いだり。気がつけば周りの植生も変わり、アダンやオオハマボウの姿は消え、オヒルギが群生する国内最大のマングローブ林の入り口、そしてど真ん中を進む状況になりました。

悪戦苦闘の中、後半は最大200mを超える川幅の先のゴール・大富船着場へ向かいました。

途中、オヒルギ、ヤエヤマヒルギ、マヤブシキ、ヒルギダマシなど両岸、中州に生育する貴重な自然を目にしながら、3年生はプランクトンの採取実験を実施しました。

ゴールまでのおよそ1.5kmは目視できるものの、向かい風となる本日最大の悪条件下、なかなか進まぬ筏を総力戦で操り、4艇全員無事にゴールしました。

ゴール後、全員で筏を解体、保護者手作りのぜんざいに舌鼓の後、解散集会を行い全日程を終了しました。



「コロナを吹っ飛ばせ」



「いざ、出陣」

「船浦のニッパヤシ希少個体群保護林」 のモニタリング調査を実施

国のレッドリストの絶滅危惧 A 類に分類されているニッパヤシは、東南アジアを中心とする熱帯地方から一部亜熱帯地方に自生し、河川の真水と海水が混ざり合う汽水域に発達するマングローブ林の構成樹種の一つとして知られています。我が国では西表島にのみ生育が確認され、世界の自生地、北限とされています。島の北部の船浦湾に注ぐヤシミナト川流域に生育するニッパヤシ群落は、国の天然記念物に指定されているとともに、国有林の希少個体群保護林として保護され

ています。

当センターでは、一時期衰退傾向であった同種の保護に資するため、年に2回葉数と周辺環境調査を実施しています。今年度の1回目の調査を6月18日に4名の職員で実施しました。当日は30度を超える熱暑の中、ウェーダーと保護具に身を包み、暑さ対策の大量の水と塩飴、冷却剤を持ちながらの調査となりました。



「調査風景」

結果は、総株数43株で全葉数560枚、幼葉出現枚数67枚となり、葉数については、枯れ葉と新葉との入れ替わりはありますが、数に大きな減少は見られませんでした。周辺環境調査では、アナジャコの塚等による陸地化等、ニッパヤシの生育に悪影響を及ぼすような状況は確認されませんでした。



「ニッパヤシの実」



「ニッパヤシ」

「カヤック運行に係る安全確保について」訓練を実施

西表島は東部の仲間川と西部の浦内川をはじめとして大小いくつもの河川があり、その周辺部には海岸部とともに希少な野生動植物の生息、生育地となっています。また、西表島の特徴であるマングローブ林も広く分布しています。当センターではこれらの生態系を保全するため、各種調査や巡視活動を行っています。しかし、西表島は道路等の整備は限られており、場所によってはカヤックによらざるを得ない状況となっています。そのため、職員の異動の際には、熟練した職員によるカヤックの知識や操縦の安全講習が行われてきました。6月にセンター職員1名、同様の業務を行う沖縄森林管理署の祖内森林事務所職員1名の操縦訓練を実施しました。



「訓練風景」1



「訓練風景」2

「森の巨人たち百選」のモニタリング調査を実施

1. 「仲間川のサキシマスオウノキ」

6月12日（金）、「森の巨人たち百選」に選定されている「仲間川のサキシマスオウノキ」の定期調査を行いました。毎年定期的に行っているこの調査では、サキシマスオウの樹勢や樹高、幹周り、板根の高さをはじめ、枝張り、光環境、林床植生や着生植物の変化などを調査しています。

今年度の調査では、幹周りや枝張り、板根の高さなど概ね健全な成長を示していました。しかし、サキシマスオウノキの生育環境については、必ずしも良好とは言えぬ方向に進みつつある要因を数点確認しました。

まず、数年前からサキシマスオウノキの樹幹に着生している「別名・絞め殺しの木」と呼ばれるアコウの根部は地表に達し現在も成長しています。また、今年度、樹幹へのタカサゴシロアリの巣が新たに確認されました。タカサゴシロアリの被害については、樹勢の衰えや腐朽などが心配され、着生木のアコウ同様、樹木医等専門家の助言も受けながら、今後対策を講じていきたいと考えています。



「樹高調査」



「タカサゴシロアリの巣」

2. 「ウトラ川のオヒルギ」

7月2日（木）、「森の巨人たち百選」に選定されている西表島北西部、浦内川支流に生育する「ウトラ川のオヒルギ」の定期調査を行いました。

毎年度定期的に行っているこの調査では、オヒルギの樹勢や樹高、幹周りをはじめ、地盤高、光環境、林床植生などの変化を調査しています。

今年度の調査では、幹周りや樹高など概ね昨年同様の数値を示していましたが、樹齢400年を超える老木であり、平成26（2014）年3月、西表島巨樹・巨木保全協議会において、倒木・枝折れ防止の支柱の補強及びシャコ塚除去の保全措置を講じていますが、サルノコシカケの着生や新たなオキナワアナジャコのシャコ塚による樹木周辺の陸地化の進行が確認されました。

樹勢の衰えや腐朽などの進行が危惧され、樹木医等専門家の助言も受けながら、今後対策を講じていきたいと考えています。



「アナジャコの泥」



「胸高直径の計測」

オヒルギ

オヒルギは、ヤエヤマヒルギ、メヒルギ、ヒルギダマシ、ヒルギモドキ、マヤブシキ、ニッパヤシとともに、マングローブ林の構成樹種となっています。マングローブ林の中でも上流に生育し西表島では一番大きな群落を作っています。花（萼）の色は赤色で地中から水面上に伸びた呼吸根は人間の膝を曲げたような形をしているため、膝根と呼ばれています。実は胎生発芽（胎生種子）し、長さ 20 cm 径は 2 cm ほどの鉛筆の形をしています。



「種子」



「膝根」



西 表 島 の 植 物

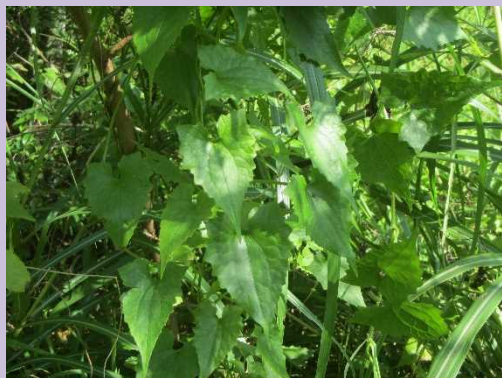
モンパノキ

- ◇ 学名: *Messerschmidia argentea*
- ◇ 科名: ムラサキ科
- ◇ 特徴: 海岸の砂浜等に自生し、樹高2m～10mの常緑低木です。葉は単葉で全縁、互生し長楕円形。多肉質で枝先に集まってつき、銀灰色の長い毛が密生しています。花は白色で実は 5 mm 程度の核果で密集します。木材は漁師の海中めがねの枠材として使われていました。方言で「ガンチョギー」と呼ばれています。
- ◇ 生育環境: 海岸砂地
- ◇ 分布: トカラ列島、先島諸島、台湾島など
- ◇ 先島諸島開花時期: 春から夏



西表島に生育する外来種

ツルヒヨドリ



(キク科 Mikania Micrantha)

南北アメリカの熱帯地域原産の多年生つる性植物で、英語で「Mile-a-minute-weed」(1分で1マイル広がる雑草)の異名を持つほど猛烈な勢いで広がると言われています。

本種は、「特定外来生物」に指定され、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」で栽培、運搬、販売等が原則禁止されています。また、「世界の侵略的外来種ワースト100」にリストアップされています。

国内では1984年にうま市で、西表島には2015年頃に確認され、当センターでは環境省西表自然保護官事務所と協力して駆除に取り組んでいます。

侵入生物 / 外来生物とは？

人間によって自然分布域以外の地域に移動させられた生物を「外来生物 / 外来種」「侵入生物 / 侵入種」「移入生物 / 移入種」などといいます。貿易大国の日本では、これまでに2000種を超える外来生物が記録されています。外来生物は、移動先で繁殖集団を形成し(定着または帰化と呼ばれます)その土地の生態系・農林漁業・人間の健康や日常生活などに対して影響を及ぼすことがあります。大きな影響を及ぼすものを、特に「侵略的外来生物」といい、世界的な問題となっています。

原因は何か？

外来生物問題が生じる原因は、様々な形で人為的に生物が運ばれ、野外に放たれること(導入と呼ばれます)です。導入されたものの一部が、野外で繁殖集団を形成し(定着と呼ばれます)長期にわたって様々な影響を及ぼすようになります。運ばれ方(侵入経路・導入経路)は様々ですが、いずれも我々の日常生活と密接に関係しています。運ばれ方によって予防方法が異なるため、導入経路の特定は、防除戦略を立てる上で重要な課題の一つです。

その影響は？

外来生物による影響は、運ばれる生物の種類と定着先の環境の組み合わせによって様々です。生態影響(その地域在来の生物多様性・生態系への影響)のほか、外来生物の持ち込みによって、いわゆる害獣・害虫・雑草などと同様の農林水産業被害・人間への健康被害を新たに引き起こすこともあります。

(引用：国立環境研究所 侵入生物データベース)

お知らせ

人事異動

令和 2年 3月31日付け
お世話になりました。

転出者(定年退職)

坂口 繁

令和 2年 4月 1日付け
よろしくお願いします。

転入者((国研)森林整備センター) 後藤 直哉

林野庁 九州森林管理局 西表森林生態系保全センター

〒907-0004 沖縄県石垣市登野城55-4 石垣地方合同庁舎内
TEL: 0980-88-0747 FAX: 0980-83-7108

URL: <http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/huresen/huresentop.htm>

